

西光

第13号

百橋山 西光寺
高岡市京町一〇―二五
電話(〇七六六)二二―二九七
FAX(〇七六六)二二―三三三〇
平成十一年九月二三日

百橋山西光寺略縁起并に資財帳

抑も始まりは平安時代、人皇五十六代清和天皇の玄孫、源満仲公が摂津国多田の庄(今の兵庫県川西市)を根拠地として清和源氏の始祖となり、やがて出家して多田院を興し、源信僧都に帰依した。多田満仲公の息、摂津源氏の祖、源頼光より四代の孫、源三位頼政公は武略に勝れ、また和歌を好くし、時の法皇後白河院に仕える。平清盛の平家一門と源為義、義朝、頼朝ら同じ清和源氏の一門である河内源氏の一統が激しく争った源平の争乱である、保元・平治の乱にも加わらず、世の騷擾と無情とを憂い、やがて出家して源三位入道となりしも、河内源氏の滅亡以後、平清盛ら平家一門の暴虐甚だしく、治承四年(1180)後白河法皇の第二皇子であり、高倉天皇の庶兄である以仁王から、平家追討の令旨を得て、平家追討と源氏再興のため、遂に長子仲綱、次子兼綱を伴い挙兵した。しかし時利あらず、延暦寺、園城寺、興福寺の僧徒の離反にあい、近江如意峰、京都山科と敗退し、以仁王を南都奈良へ逃さんと南を目指し、やがて宇治平等院に立て籠もって平家の軍勢を防ぐも効なく、宇治橋の合戦にて以仁王と頼政公の一族郎党自害してはてた。されど頼政公の第三子広綱、幼弱をもって合戦に参加せず難を逃れ、密かに身を隠し、それから五年後、壇ノ浦の合戦にて源頼朝が平家を滅亡させて以後、頼朝公に見出され、駿河守に任せられたものの、あまりの悲惨な世に無情を深く感じ、また源平の合戦に散った一族の菩提を弔うべく、出家して京都山科の真言宗醍醐寺の山上伽藍である上醍醐に隠棲してその生涯を閉じたと伝えられる。

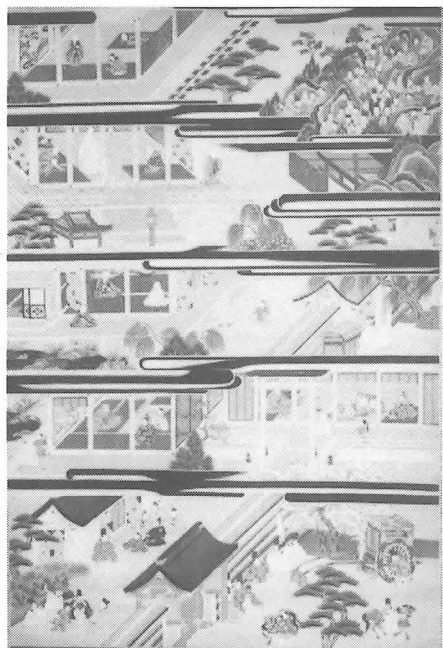
やがて争乱続く時代の中を、一族の後継者は、身を隠しつつ先祖の菩提と無情の世を見据えて天台宗西光寺を山城国(京都府)愛宕郡百橋谷に創建した。京都洛北の愛宕山の山中には当時天台宗白雲寺と総称される五寺五千坊があったとされ、西光寺もその中の一であったのであろう。現在愛宕山頂には愛宕神社があり、山麓には清和天皇陵があるのみで、百橋谷の所在はなお明かではない。(百橋の名の由来については、近年まで京都市上京区に百々橋という石橋があり(橋桁は別の場所に移転されて残っている)、かつて室町時代京都において天下を二分して十一年間も続いた応仁の乱では、この橋を境にして西山山名宗全と東軍細川勝元とが熾烈な戦いを繰り広げたとされる。)愛宕山の山中に隠れ、洛中の権力の争いや都をめぐる戦乱の苦難からは遠いと思われた洛北の西光寺も平穏ではなく、打ち続く戦乱の中、兵火に遭い堂舎尽く灰燼に帰し、莊園のつてを頼って越中国射水郡に下った。京より共に同道した家司篠井家は射水郡の庄川に定着して壘田開拓に励み、寺族西光寺は小矢部川の流域、射水郡守山村字百橋に拠を構え、氷見郡との境、二上山の両麓である川西一帯を教化したと推測される。かつての寺跡は現在の百橋集落の中ではなく、百橋地番をもつ、板屋と岩坪の間、今のアクアパレスの近くではないかと

推定される。手洗野の山上伽藍や五十里、二上の山上、山中の寺院との関係も、さらに宝達山、石動山の諸寺院との関係も今のところ不明である。

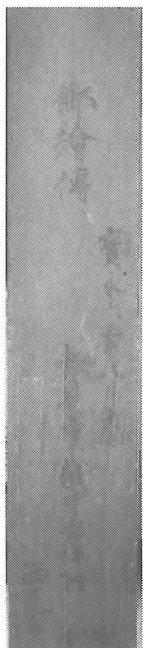
室町時代文明五年(1473)時

の住職証光は本願寺第八世蓮如上人より西光寺の寺号と釋証光の法名を許されて、それまでの天台宗から浄土真宗に改宗し、浄土真宗西光寺としての開基となった。以来その系譜は二十八代を数える。その後江戸時代寛文年間(1661―1673)に岩坪村に転じ、さらに天保二年(1831)に現在の地に移転した。岩坪村に移った時代には西光寺は関東の親鸞二十四輩の一人性信房開基の板東報恩寺(現在東京都台東区東上野六丁目)の下にあったことが古記録から窺われる。すなわち西光寺寺宝である「親鸞聖人絵伝」四幅を入れた箱蓋に記された墨書に「御絵伝 宝永六年(1709)八月二十日報恩寺下越中岩坪村西光寺」とある。西光寺の不思議な歴史の変遷をたどることができる。現在の西光寺門徒は小矢部川流域の八口、答野島、手洗野から、五十里、守山、二上など、一方右岸の長慶寺、米島、波岡、大源寺、荒屋敷、立野など、さらに庄川左岸の伏間江、西広上、三本松などいづれも小矢部川、庄川の流域に広がり、他方二上山の氷見側の山麓の堀田、大浦、矢方、万尾、さらに仏生寺では鞍骨、脇谷地、そして窪、柳田、氷見に及んでいる。寺勢はますます広がり、伏木、礪波、大門、小杉、富山はいうに及ばず、県外の金沢、東京、大阪、北海道、さらにはブラジルなど海外でも多くの門徒衆が活躍している。

現在西光寺には、寺宝として本尊である、木造阿彌陀如來立像一軀のほか、親鸞聖人画像および先の親鸞聖人絵伝などがある。この他仏具として門徒の祠堂による寄進をうけた道具類があり、多くは先の大東亜戦争の金属供出で失われたが、なお一部はその難を逃れたものが残っている。梵鐘は戦争の時金物供出に出し、現在は戦後になって昭和二十二年に復興した梵鐘がかかっている。堂塔としては木造本堂は正面九間で、近世真宗系の本格的な仏堂として、規模の大きさといい、見事な向拝や欄間の彫刻を持つ本堂であるが、長年の疲労で構造上の歪みが著しい。鐘楼は大正八年五十嵐小太郎氏の寄贈になる御影石積み基壇を持つ立派な堂である。庫裏は大正九年のものと伝える。このように西光寺は立派な縁起を持ち、幾星霜を経て今日なお益々隆盛を迎えているのも今日まで苦難の歴史を乗り越えてきた先祖達の不思議な「御縁」のお陰と思慮される。



親鸞聖人絵伝



御絵伝箱蓋表

《門徒世話人会からのお知らせ―本堂修繕計画―》

去る三月十四日に開かれた西光寺門徒世話会において、将来にわたる本堂の修繕の必要性が話し合われ、本堂の建物の調査を経て、修繕の計画を進めることが認められました。現在本堂は屋根瓦が相当傷んでおり、破損やずれが著しく、また本堂は東南の方向へ傾こうとするため、本堂の後ろに支えの支柱をもって止めてある状態です。そのため根本的には本堂の基礎や建築構造の修理計画を合わせて行い、最後に屋根瓦の葺き替えに至る修繕工事が予想されます。長期にわたる十分な検討を要しますが、現在の厳しい折りではありますが、西光寺百年の大計のためよろしくご協力をお願いいたします。

《アンケートについて》

先般お願いしました西光寺に対するアンケートには多くの方からの回答が寄せられ、有り難うございました。多大のご期待と信頼をもっておいでのことと深く思いを新にいたしました。ところでその中で、旅行の件ですが、多くの方から特に国内で浄土真宗ゆかりの各地を一緒に訪ねてみたいとの希望もあり、北陸、関西、関東方面への浄土真宗ゆかりの地を訪ねる旅行を何時か計画してみたいと考えています。そのおりに是非大勢の参加をお願いいたします。

《仏事豆知識》

〔祠堂〕 持仏堂や位牌堂など、本来は寺院にあつて先祖や死者の冥福を祈り、供養、廻向するための建物を意味し、やがて亡くなった者の親族が、菩提寺に財物を寄進して、その永代供養を依頼することを意味するようになった。

西光寺でもこれまで、多くの仏具や御衣・袈裟・打敷のほか、堂塔の建立や修繕に関わる寄進がありました。寄進される方々のご先祖様や亡くなられた身内への尊いお心やかかけがないお気持ちを仏様にお伝えする有り難い機会です。本堂内の荘厳のほとんどは祠堂の寄進によってまかなわれています。

《行事予定》

一月一日・二日・三日	修正会	
一月八日	法話会（初お講）	〔講師〕 大宝寺 龍本茂樹師
三月八日	法話会	〔講師〕 大宝寺 龍本茂樹師
毎月八日	法話会	〔講師〕 大宝寺 龍本茂樹師
七月十四日・十五日	お盆（新盆）	
八月七日・八日	永代祠堂経会	〔講師〕 光専寺 葉室俊和師
八月十四日・十五日	お盆（旧盆）	
十月八日・九日	報恩講	〔講師〕 長福寺 藤井 乗師
十一月八日	法話会（終お講）	〔講師〕 光専寺 葉室俊和師
十一月二十七日	御正忌	〔講師〕 願浄寺 嶋 秀誠師
十二月三十一日	除夜勤行・除夜の鐘	